

混雑状況表示 AI活用

秀峰生徒のシステム秀逸

松本秀峰中等教育学校(松本市)の生徒4人が本年度、同市のMウイング2階の学習スペースの混雑状況を表示するシステムを構築し、実証実験を行った。カメラに写った人数をAI(人工知能)が検出し、サイトに混雑状況を公開するシステムで、検知人数と実人数はおおむね合っていたという。地域の課題解決につながる取り組みで、生徒たちは学校の枠を超えた活動の展開も見据えている。

(赤羽洋輔)



混雑表示システムの実験結果を発表する生徒(右)

3～5年生 4人で構築 松本市が打診し実証実験

生徒会活動を安定・継続的に進めるための有志団体「SKETTS」(スケッツ)のエンジニア班のうち、高樋大雅さん(4年生)、木下千仁さん(同)、吉沢源太さん(3年生)、塩畑太朗さん(5年生)が取り組んだ。

昨年12月中旬、学習スペースの両端にウェブカメラとミニコンピュータを置き、1分おきに捉えた画像の人数をAIで検出。過去10分の平均を取り「混んでいます」「やや混んでいます」「空いています」と3段階に分けた混雑状況を、学習スペースに置いたタブレットにピクトグラムで表示した。人数検出、混雑状況の公開でプログラミングの技能を生かした。

昨年9月の同校文化祭で

混雑表示システムを運用したところ、文化祭を見学していた若者参画課職員目にも留まった。市は、無料通信アプリ・LINE(ライン)を用いた混雑状況の把握に取り組んでいたが精度が上がらず、生徒に実験を打診した。

AIの人数処理はその場に置いたコンピュータで行い、サーバーに送信するデータは人数の数値のみなど、プライバシーにも配慮した。同課は、実際の運用には機材やネット環境の面で課題があるとしつつ、「課題解決に若者が動いてくれている。輝ける環境をつくりたい」と話す。

高樋さんは、スケッツの取り組みを先輩たちにつなげたい思いに加え、市内で高校生対象のAI講座が開かれている状況などを踏まえ、学校の枠を超えた「市の課題解決につながる団体をつくりたい」と展望している。